

『安樂集』における他力の一考察

野村 淳 爾

はじめに

道綽の主著である『安樂集』に曇鸞の文が多く引かれていることや『続高僧伝』の説示⁽¹⁾などにより、道綽が曇鸞に多大な影響を受けたことは明白である。道綽の教義において、十念思想や空思想に基盤をおいた二種法身説などは非常に重要な位置を占めている。

しかし、曇鸞が初めて確立し終始一貫して主張する「他力」義は、『安樂集』において、第三大門難易二道釈に簡単に示されているのみであり、多くは明言されていない。

さらに先行研究においても、「曇鸞の他力義を時機の省察と鋭い人間観の洞察によって展開させたもの」、また、「自力他力を聖浄二門判に展開させたもの」など、曇鸞の他力義を道綽独自の教義に関連づけたものは多く見られるが、道綽の他力義そのものに関する詳細な研究は見られない。そこで、小論では曇鸞教義を継承・展開している道綽の他力義を再検

討し、道綽の他力義の一つの見方を提示したい。

一 曇鸞の他力について

曇鸞の思想の基盤となるものは『論註』冒頭に引用されている「難易二道」であり、五濁の世、無仏の時に、阿惟越致を求めることを難（自力）とし、信仏の因縁をもって往生を得、仏力に住持せられて正定聚に入ること易行道（他力）と明かしている。この仏力の虚無でないことを証明するために、「三願的証」をもって力用の意味内容を示している。『大経』第十八願、第十一願、第二十二願を、

縁佛願力故十念念念佛便得往生。得往生故即免三界輪轉之事。無輪轉故。所以得速。

縁佛願力故住正定聚。住正定聚故必至滅度無諸迴伏之難。所以得速。

縁佛願力故超出常倫諸地之行現前。修習普賢之德。以超出常倫諸地行故。所以得速。」（大正四〇・八四四a）

と説き、他力に乘ずべき理由を「仏願力」をもって証明し、

さらには「仏願力」による「往生」「住正定聚」の得速性を示している。そして、「三願的証」の後、

以斯而推他力。爲増上縁。(大正四〇・八四四a)

と結んでいることから、得速性が備わっているのはすべて他力を縁としているからであると説明している。つまり、仏願力を増上縁とすることが他力であると示されている。

二 『安樂集』における他力の継承と展開

① 難易二道釈における曇鸞他力義の継承

道綽は他力について第三大門難易二道釈において語っている。易行道を示す箇所において、

言易行道者。謂以信佛因縁願生淨土。起心立德修諸行業。佛願力故即便往生。以佛力住持即入大乘正定聚。正定聚者即是阿毘跋致不退位也。譬如水路乘船則樂。故名易行道也。(大正四七・一二b)

と示し、信仏因縁による淨土往生を易行道と顕示している。そして、菩提は一つだけであり、修するべき因は二つもないはずであるが、なぜ今、因を修して仏果を目指すことを難行といい、それとはもう一つ別に、淨土に往生して大菩提を期すのが易行道であると言っているのかという問いを發している。それに対する答えとして、すべての行法は自力自摂の法門と他力他摂の法門に分けることができると言及している。つまり、この答えをもって、淨土へ往生する方法としての易

行道が他力の法門であると読み取ることができる。難易二道釈の最後に他力往生の根拠について『大經』「第十八願」取意の文をもって、

故大經云。十方人天欲生我國者。莫不皆以阿彌陀如來大願業力爲増上縁也。若不如是。四十八願便是徒設。後學者。既有他力可乘。不得自局已分徒在火宅也(大正四七・一二c)

と結論付けている。この文は『論註』「三願的証」に表れる「増上縁」や「仏願力」を「第十八願」文に合釈している説示である。⁽³⁾つまり、曇鸞が三願的証をもって他力の根拠と示していることと同様に、『安樂集』においても、他力の経証として三願的証合釈の十八願文を示し、他力を阿彌陀仏の本願力と捉えていることが分かる。

以上、「易行道他力の顕示」と「本願文をもって他力の根拠を示したこと」を『安樂集』における曇鸞他力義の継承と捉えることができる。

② 道綽独自の「他力」の説示

他力の根本原理は曇鸞の他力義を継承するものであるが、『安樂集』には他力について特徴的な表現が見受けられる。

臨命終時。阿彌陀如來光臺迎接遂得往生。即爲他力。(大正四七・一二c)

この文は他力を阿彌陀仏のはたらきとして、具体的に臨終

『安樂集』における他力の一考察（野村）

の来迎であると明示している。これは道綽の特徴的な表現である。つまり、曇鸞とは明確に異なった他力義の展開がみられ、他力を阿弥陀仏の臨終来迎という有相をもって捉えるのである。

三 『安樂集』における「他力」「来迎」に関する説示

「他力」と「来迎」に関する言葉の使用箇所を見ると、

・ 第二大門破異見邪執・心外無法

或有人言。所觀淨境約就內心。淨土融。心淨即是。心外無法。

何須西入。（大正四七・八c）

命終之時即得現見阿彌陀佛與諸聖衆住其人前。得生也。（大正四七・九a）↓「その人の前に住したまふ」

・ 第四大門

十方佛國皆爲淨土。法師何乃獨意注西。豈非偏見生也。（大正四七・一四b）

是故法師臨命終時。寺傍左右道俗皆見旛花映院。盡聞異香。音

樂迎接遂往生也。（大正四七・一四c）↓「迎接」

・ 第六大門義推

何故要須面向西坐禮念觀者。（大正四七・一八a）

臨命終時告弟子言。阿彌陀佛與諸聖衆今在我前。

誦阿彌陀經故。是以垂終佛自來迎。（大正四七・一八b）↓「いま我が前にまします」「来迎」

・ 第七大門此彼修道

若欲發心歸西者。單用少時禮觀念等。隨壽長短。臨命終時。光

臺迎接。迅至彼方。位階不退。（大正四七・一八・c）↓「迎接」

・ 第十一大門死後受生勝劣

若能生信歸向淨土。策意專精。命欲終時。阿彌陀佛與觀音聖衆光臺迎接行者。歡喜隨從合掌乘臺。須臾即到。無不快樂。乃至成佛。又復一切衆生造業不同有其三種。謂上中下。莫不皆詣閻羅取判。若能信佛因緣願生淨土。所修行業竝皆迴向。命欲終時。佛自來迎不于死王也（大正四七・二一a）↓「来迎」「迎接」

とある。つまり、「来迎」「迎接」などの言葉は西方の易入性・殊勝性を示す箇所で見える。道綽において「来迎」に関する語と西方の問題を関連づけて説示している意図があると考えられる。また、第五大門・禪觀難易において、次のような問答がある。

若西方境界勝可爲禪定感。此界色天劣。不應爲禪定招。

若論修定因。該通於彼此。然彼界位是不退。并有他力持。是故説

爲勝。此處雖復修定剋。但有自分因。闕無他力攝。（大正四七・二七b）

この文は西方淨土が「他力の持つことあり」と、阿弥陀仏の本願力により支えられていることを明示している。

以上挙げたように、西方淨土と来迎・他力が結びついて語られている理由として、道綽の時代は往生思想が執着そのものという考えや無相空理の視点から淨土願生を否定する思想が非常に大きな勢力となっており、淨土という有相を取ることで自体が執着と同様と考える風潮が強かった。つまり、淨土

が大乗仏教の空・無相の基盤から離れていると批判されていたのである。しかし、この問題に対して、道綽は他力を阿弥陀仏の来迎という具体相で示し、西方浄土の問答と結びつけることにより、西方浄土の教えの大乗としての正当性を示しているのである。⁽⁶⁾

小結

『安楽集』において、他力易行道は曇鸞の思想を継承するものであったことはたしかである。他力往生の論拠として「十八願」取意の文に三願的証を合わせて述べられていることにより、曇鸞が明確にした他力の原理を『安楽集』の中에서도見出すことができる。しかし、『安楽集』においては、曇鸞から継承した他力の原理を単に明かすだけではなく、当時の西方浄土に関する否定的な扱いに対して、阿弥陀仏の本願力、即ち他力によって、西方浄土の教えの大乗としての正当性を打ち出していく役割があったものと思われる。つまり、『安楽集』での他力の見方として、往生浄土の原理が来迎という形式をとるという視点によって、西方浄土に対する論難を打破していると考えられる。他力を西方浄土の正当性を論証する一つの手段として展開していることに着目できるだろう。

『安楽集』における他力の一考察（野村）

- 1 大正五十・五九三c。
- 2 山田行雄氏「真宗の教理史上における他力論」、山本仏骨氏『道綽教学の研究』二六四頁～二八八頁参照。
- 3 内藤知康氏『安楽集講読』二二八頁、コンウェイ・マイケル氏「道綽教学における本願思想」参照。
- 4 他に西方浄土を問題にしている箇所として、第二大門破異見邪執で兜率天と西方、十方と西方を比較、第六大門でも十方と西方を比較する箇所がある。この部分には「他力」「来迎」に関する記述はないが、西方浄土を勧める引文として扱われている『十方随願往生経』の引用が見られる。
- 5 大正五〇・五八三～六四一、山本氏前掲書二二頁～二八頁参照。
- 6 道綽は有相による往生を肯定的に捉えている。第二大門破異見邪執において二諦により、有相が論証されている。さらに第六大門において凡夫は相に乗じて往生することを勧めている。

〈キーワード〉 道綽、他力、臨終来迎、西方

（龍谷大学大学院）